

古代の須恵器と各務原

壺 甕 瓶 つぼ かめ びん T u B o K a M e B i N

編集 各務原市埋蔵文化財調査センター
発行 各務原市教育委員会
Tel 0583(83)1123
平成17年12月 増刷

写真1.甕 蘇原地区出土 6世紀後半(写真10と同)



写真2.甕 須衛町宮東出土 5世紀後半(美濃須衛窯産?)
口径(推定)13.5cm 胴部径18.0cm 器高14.9cm

美濃須衛窯跡群

各務原の北部山地には、美濃須衛窯跡群(以下、美濃須衛窯とよびます。)とよばれる須恵器の窯跡が分布しています。その始まりは明らかではありませんが、およそ古墳時代の6世紀の終わりから7世紀の初めにかけて、最初の窯が築かれたと考えられます。そして、7世紀の終わりから生産規模が拡大し、奈良時代(8世紀)には全国的にも有数の窯跡群となりました。しかし、平安時代(9世紀)にはいると、なぜか急速に窯の数が減少し、やがて9世紀の終わりには須恵器生産が廃絶し、新たな灰釉陶器の生産に転換してゆきました。



写真3.広口壺 蘇原地区出土 5世紀後半
口径10.7cm 胴部径13.7cm 器高11.2cm



写真4.広口壺 蘇原加佐美山古墳群出土 5世紀後半
口径10.6cm 胴部径14.4cm 器高11.7cm



写真5.甕 蘇原地区出土 5世紀後半～6世紀前半
口径17.8cm 胴部径29.8cm 器高26.0cm

須恵器のはじまり

須恵器は日本ではじめて本格的な窯を使って焼かれた焼き物で、釉薬を用いない陶器質の器です。その始源は古代に朝鮮半島から日本に伝わった陶質土器とよばれる焼き物にあり、およそ古墳時代中期（5世紀）に現在の北九州や瀬戸内地域、そして近畿や東海地域で生産が開始されました。

日本では、縄文土器から弥生土器、そして古墳時代の土師器にいたるまで、伝統的に素焼きの土器が用いられ、日常の生活や祭祀の場で重要な役割を果たしてきました。それに対して須恵器は、素焼きの土器に比べれば堅牢で耐水性にも優れていますが、なによりも器としての造形や焼き上がりの色調に重厚な威厳が感じられます。

須恵器の生産には、それまでの日本の土器生産とは異なり、大規模な労働力を必要とする窯の構築から、燃料としての膨大な薪の確保、そして製品を窯場から消費地に運び出すための交通手段など、須恵器製作工人のみでは解決できない多くの社会的課題が存在しています。そのため、須恵器の安定的な生産と流通を図るためには、製作工人を組織化し、流通機構を維持管理するための権力機構の存在が不可欠となります。

日本における国家形成期とされる古墳時代では、そこに当時の大和政権を中心とする各地の首長たちの存在があります。かれらは日本に須恵器がもたらされた段階から須恵器生産に深く関与していたと考えられ、須恵器は、当初から支配者の威信財として、あるいは祭祀儀礼に関わる器として宝器的に扱われていたのです。

須恵器と古墳

古墳時代後期（6～7世紀）になると、須恵器は古墳の副葬品として横穴式石室に納められるようになり、全国的にも多くの窯が築かれて大量の須恵器が生産されるよ



写真6.甕 蘇原地区出土 6世紀
口径16.2cm 胸部径26.9cm 器高28.0cm



写真7.短頸壺 蘇原地区出土 6世紀
口径7.4cm 胸部径13.8cm 器高9.3cm

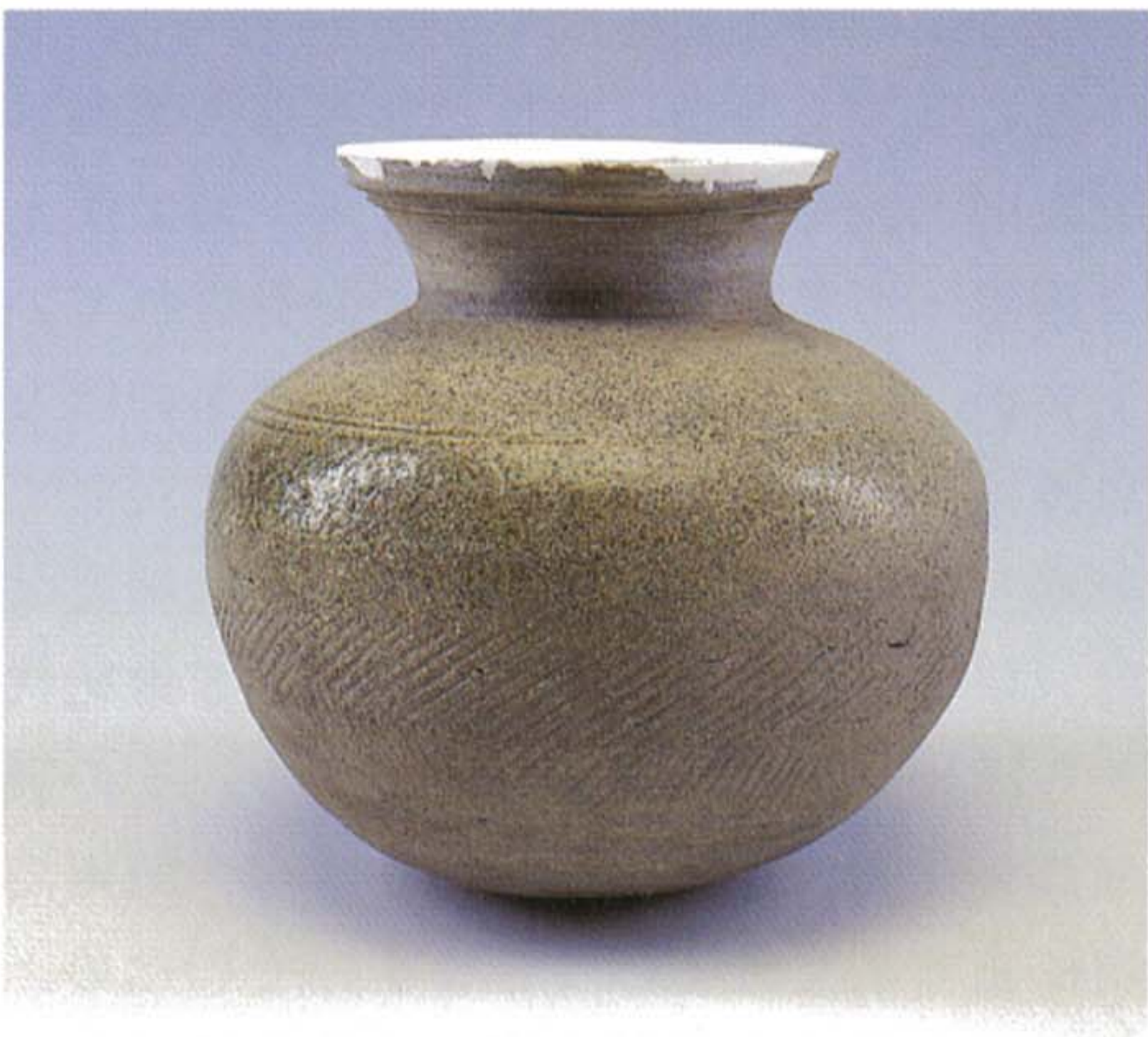


写真8.壺 蘇原地区出土 6世紀
口径11.2cm 胸部径18.2cm 器高17.0cm

うになりました。このことは、それまでの首長層を中心とする古墳の築造が地域の新興豪族層にまで拡大したからですが、その背景として、古墳時代中期以降における地域開発の進展や、朝鮮半島諸国との活発な交渉が地域豪族層の政治的成長と文化の移入を促し、新たな支配者層が形成されたためと考えられます。その結果、朝鮮半島に起源をもつ横穴式石室墳が新興豪族層の墳墓として普及し、そこで執り行われる古墳祭祀に須恵器が導入されたのです。

美濃においては、古墳時代後期に築造された横穴式石室墳の数は3000基以上と推定され、古墳に納められた須恵器も膨大な数にのぼります。各務原では、横穴式石室が導入される以前の5世紀の終わり頃から古墳に須恵器が副葬されるようになり、横穴式石室が出現する6世紀以降になると、さらに多くの須恵器が石室に納められるようになりました。

須恵器がどのような役割で古墳に副葬されたのかは明らかではありませんが、鶴沼地区の半ノ木洞古墳では器のなかに蛤の殻が一枚残っていましたので、葬祭の供え物などが盛られていた可能性があります。

祭器から食器へ

須恵器の性格が大きく変化するののは、6世紀の終わりから7世紀の初めにかけての時期です。それまで主に祭祀の器であった須恵器が日常生活の器としても広く浸透するようになり、祭祀に関連する遺跡や古墳のほか、集落遺跡からも多く出土するようになりました。しかし、こうした変化は全国的に一斉に起こったものではなく、また、須恵器のもつ祭器的な性格が薄れたわけでもありません。しかし、地域によっては急激な変化が想定される場合もあり、そこに日本の古代における須恵器の果たした役割を考える必要があります。



写真9.壺 蘇原地区出土 6世紀
口径13.2cm 胸部径21.7cm 器高19.6cm



写真10.壺 蘇原地区出土 6世紀後半
口径13.1cm 胸部径29.4cm 器高29.4cm



写真11.短頸壺 前渡西町矢熊山北古墳群出土 6世紀後半
口径10.0cm 胸部径14.8cm 器高11.4cm

この時期の日本では、推古天皇のもと聖徳太子や蘇我馬子が積極的な内政外交政策を推し進めていました。仏教寺院の建立や政治制度の改革整備、そして遣隋使の派遣にみられる中国との国際関係の構築など、それまでの氏族や地域を単位とした政治や祭祀のあり方を脱却し、国としてのまとまりを指向する時代でした。その結果、古墳時代とその体制を象徴する古墳の築造は衰えを見せはじめ、古墳に副葬される須恵器も急速に実用を離れて小型化、形骸化してゆきました。一方、この時期には新たな須恵器の器種が登場しています。それは、6世紀半ばに仏教の伝来に代表される新たな文化として日本に伝わり、もともとは寺院などで使用されていたと考えられる金属製の器を模倣したもので、金属器が稀少な当時としては多くの需要をまかなうため、あるいは新たな文化の象徴として須恵器の器種に取り入れられたと考えられます。

美濃須恵窯の成立

美濃須恵窯では、この6世紀の終わりから7世紀のはじめにかけて最初の須恵器窯が出現しています。美濃須恵窯は5世紀後半にも単発的に須恵器を生産した可能性があります（写真2）、確実に窯が出現するのはこの時期からです。

ところで、美濃における須恵器生産は、現在、大垣市周辺・岐阜市北部・関美濃・各務原・可児の各地で窯跡が発見されていますが、いずれも6世紀前半にさかのぼる窯跡は発見されていません。それに対して、美濃と接する尾張では、猿投山西南麓窯跡群（以下、猿投窯とよびます）が5世紀代から活発な生産活動を行っており、その製品は美濃を含む東海地域から中部・関東地域にまで広く分布しています。そのため、美濃における須恵器生産は独自の成長をみることなく、6世紀の終わりにいたるまで



写真12.提瓶 蘇原地区出土 6世紀
口径1.4cm 胸部径22.3cm 器高24.8cm



写真13.提瓶 前渡西町矢熊山古墳群出土 6世紀後葉
口径8.0cm 胸部径13.3cm 器高19.2cm



写真14.台付長頸瓶 前渡西町出土 6世紀後葉
口径8.8cm 胸部径17.1cm 器高32.6cm

未成熟な段階にあったと考えられます。

さて、6世紀後半には、各務原市鷺沼大伊木地区の木曾川北岸に所在するふな塚古墳（全長約45m）や大牧1号墳（前方後円墳？後円部直径30m）など、美濃における最後の前方後円墳が各務原地域に築かれています。それは、中央における新たな政治体制のもとで、地域においても政治的支配関係の再編が進行し、美濃における支配者層の政治的基盤が尾張を中心とするものから、畿内中央を指向するものとなったためと考えられます。しかし、7世紀以降の古墳築造の衰えとともに古墳時代の伝統的な祭祀儀礼が衰退するようになると、旧来の須恵器もその実態を失うこととなり、須恵器は祭祀の容器から実用の食器としての性格を強めることとなりました。美濃須衛窯の須恵器生産においても、この時期、畿内中央から派遣された須恵器工人による新たな器種の生産が想定されますが、7世紀後半になると食器としての性格は一層強まり、形や大きさも規格化されて大量生産が行われるようになりました。

美濃須衛窯の発展

須恵器がその生産のピークを迎えるのは、奈良時代を中心とする7世紀の終わりから8世紀、そして平安時代前期の9世紀にかけてのことです。この時期は、都が藤原京から平城京、そして長岡京を経て平安京に遷り、政治制度は律令制にもとづく中央集権的国家体制がとられていました。須恵器は、律令体制下においては税の一種として国家により貢納が義務付けられていましたが、それを負担する国として平安時代の延長5年（927）にまとめられた『延喜式』という書物に、筑前（福岡県）・備前（岡山県）・讃岐（香川県）・播磨（兵庫県）・摂津（大阪府）・兵庫（兵庫県）・和泉（大阪府）・近江（滋賀県）・美濃（岐阜県）の8ヶ国がありました。美



写真15.横瓶 蘇原地区出土 7世紀(美濃須衛窯産)
胴部長23.5cm 胴部径17.6cm



写真16.長頸瓶 前渡西町出土 7世紀(猿投窯産)
口径7.0cm 胴部径13.4cm 器高15.6cm



写真17.平瓶 鶴沼地区出土 7世紀(美濃須衛窯産)
胴部径12.8cm 現高11.2cm

濃では、美濃須衛窯が7世紀後半から生産が大規模化し、ほぼ美濃における須恵器生産を独占するようになりました。そして、8世紀にはいると美濃須衛窯で生産された須恵器は、地元的美濃や飛騨、そして尾張北部にまで濃密に分布し、さらに、東は現在の長野県松本地域から西は大阪府、そして南は三重県中部までの広範囲に広がっています。

現在のような商品経済の発達していない古代にあっては、生産地と遠隔の消費地の間には何らかの政治的な要因が介在していたと考えられます。食器としての須恵器の性格からすれば、すでに7世紀後半の段階で全国的に窯場が開かれており、特殊な性格の製品を除けば、遠隔の地域にまで壊れやすい須恵器を運ぶ必然性はないと考えられるからです。また、律令体制下における須恵器の貢納制からすれば、地方の製品が畿内中央から出土する意味は理解できるとしても、地方の製品が遠隔の他地域に運ばれる背景には、そこに両地域を結ぶ政治的な背景が存在していると考えられるのです。そして、古墳時代中期以来の伝統的な須恵器生産地である畿内や尾張の窯場と異なり、美濃須衛窯は7世紀の終わりになって急激に生産規模を拡大しているところから、美濃須衛窯産須恵器のこうした動きには、律令的国家体制の整備に伴う須恵器の需要増大があると考えられます。

須恵器生産の変化

律令制度の導入による中央と地方の行政機構の整備によって、地方においても中央と共通する政治的な儀式や儀礼が執り行われるようになりました。そこで使用される須恵器は当然ながらよく規格化された共通の形式による製品で、地域により微細な差違はみられるものの、ほぼ全国的にも共通する食器の様式として成立しています。美



写真18.提瓶 蘇原長者屋敷出土 8世紀前葉(美濃須衛窯産)
口径12.0cm 胸部径16.8cm 器高23.8cm



写真19.平瓶 鷺沼地区出土 8世紀前葉(美濃須衛窯産)
口径5.0cm 胸部径10.7cm 器高7.9cm

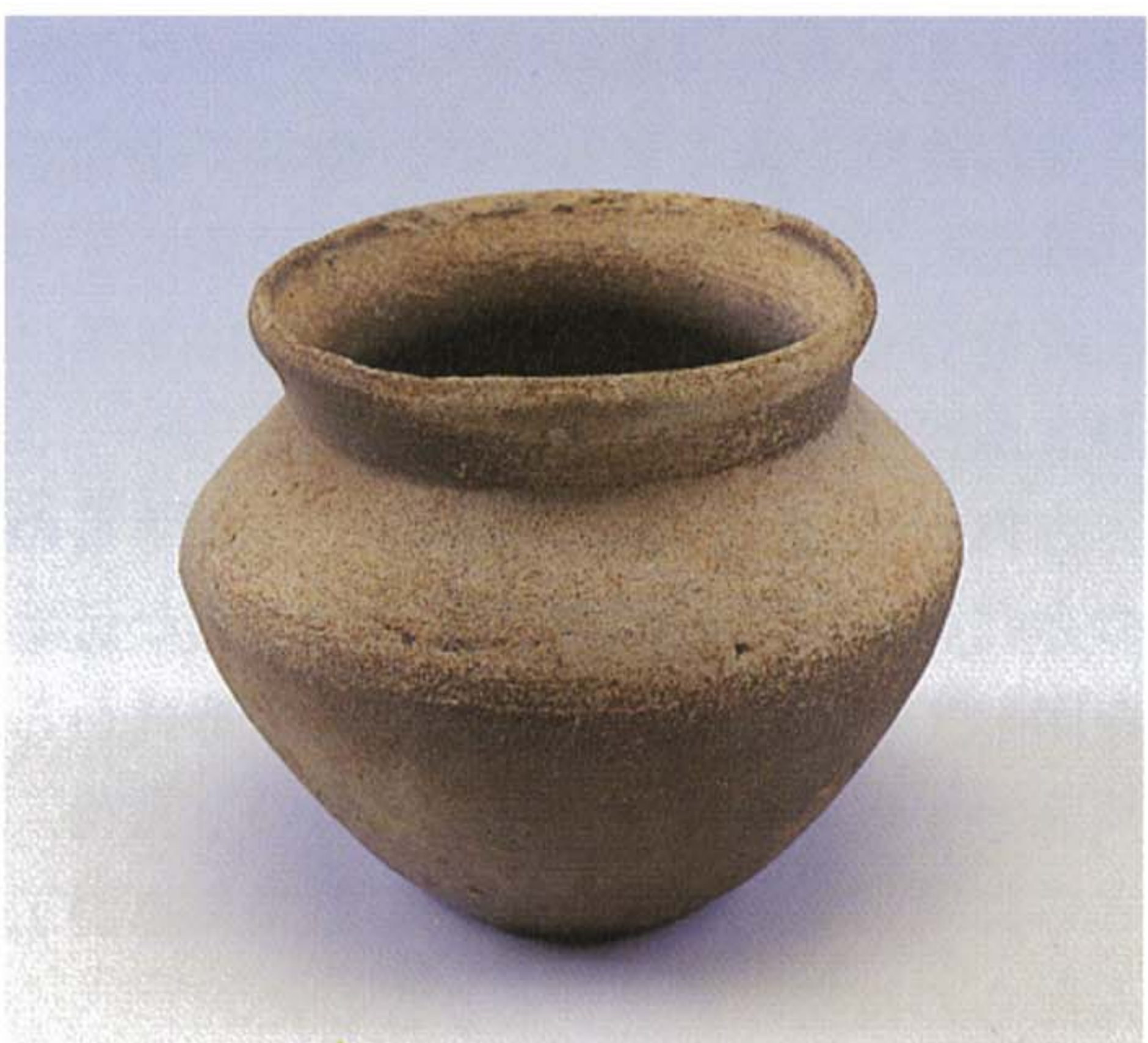


写真20.広口壺 蘇原地区出土 8世紀
口径10.4cm 胸部径4.1cm 器高11.7cm

濃須衛窯も、そうした背景のもとにモデル的な須恵器を生産することで隆盛を迎え、各地に運ばれたものと考えられます。

しかし、中央・地方を問わず、律令という法律により統一された支配体制のもとで、統一された形式の食器を用いることを目指す時代はそれほど長くは続きませんでした。8世紀後半にはいると、それまで須恵器を盛んに生産していた地域で生産が衰えたり、反対に須恵器の生産が増加する地域が現れました。

美濃須衛窯では生産量にそれほどの変化はみられませんが、前半代に比べて大きな変化は、信濃への須恵器の流入が減少したことがあげられます。また、器としての規格が崩れはじめ、相対的に大型品が減少し小型の器種が増加しています。一方、他地域への搬出が減少したのに対して、地元的美濃や尾張北部の集落遺跡から出土する須恵器の量は増加傾向を示しており、この時期、ほぼ地元で生産し消費するという地域的な経済圏が成立している可能性があります。しかし、そうしたなかで、三重県明和町（みえけんめいわちやう）に所在する齋宮跡（さいくわあと）からは、8世紀後半から9世紀前半にかけて、美濃須衛窯で生産された須恵器が、ある一定量継続的に出土しており、美濃と伊勢、あるいは美濃須衛窯と伊勢神宮を奉祭する齋宮との特別な関係が想定されます。

須恵器の終焉

須恵器は、貴重な祭祀の器から儀式や儀礼の器、そして日常食器としての器へと、時代が下るにつれてその性格も変わりました。時期や地域によって決して一律とは言えませんが、その終末はほぼ平安時代中期（10世紀）にあります。

この時代は、894年に遣唐使が停廃されたのちも民間の貿易が盛んとなり、中国からは青磁や白磁などの陶磁器が多く流入す



写真21.四耳壺 蘇原地区出土 8世紀前半(美濃須衛窯産)
口径12.0cm 胴部径23.6cm 器高18.8cm



写真24.長頸瓶 蘇原地区出土 8世紀後半(美濃須衛窯産)
口径4.9cm 胴部径11.7cm 器高10.4cm



写真22.長頸瓶 蘇原地区出土 8世紀中葉(美濃須衛窯産)
口径(推定)8.0cm 胴部径18.3cm 現高18.5cm



写真23.平瓶 蘇原野口町出土 8世紀後半(美濃須衛窯産)
胴部径10.7cm 現高6.4cm

るようになりました。そうした影響を受けて、平安時代になると新たに灰釉陶器とよばれる焼き物が登場しました。

灰釉陶器は、平安時代初めの9世紀前半に尾張の猿投窯で生産が開始された新たな焼き物です。須恵器と異なり、透明で薄い灰釉を掛けた堅緻な器で、中国の青磁や白磁などの影響を受けて生産が始まり、平安時代をとおして盛んに生産され、須恵器に取って代わりました。美濃須衛窯においても9世紀の終わり頃には本格的に灰釉陶器の生産技術が導入されました。

美濃須衛窯における須恵器生産は、灰釉陶器の生産が導入された後も、甕かめの生産を継続することで灰釉陶器生産の一部に取り込まれ命脈つなを繋ぎましたが、やがて平安時代後期の11世紀になると、ほぼ完全にその生産を停止し、古墳時代以来、約400年におよぶ歴史的役割を終えました。

古代の各務原は、須恵器という焼きものの存在をとおして日本の歴史に重要な足跡を印していますが、そこには古墳時代から須恵器を使い続けてきた長い伝統と文化、さらには幾世代にもわたる多くの須恵器工人たちの技術の継承がありました。